

永正二四年（一五二七）、奥州の宗濟を口説き落とした真里谷信勝は、遂に彼を城内に招き入れた。上座に勧められると、宗濟は躊躇なく腰を下ろした。

「古河公方ではもはや関東を統べること叶いませぬ。宗濟様、このうえは何卒遺俗なさり、新しい秩序となられますよう」

真里谷信勝の囁くこの言葉に、いちいち頷きながら、宗濟の胸中は放浪のなかで目撃した、戦乱に疲弊した多くの名もなき民たちの、怨嗟が渦巻いていた。古河公方家の父子対立の折、宗濟は兄・高基に附いた。しかし、どこか一致する考えと異なり、いつしか袂を分かっていた。確かに、このまま古河公方や関東管領が主導権を握っても、関東に暮らす民を潤わせることなど、夢のまた夢であった。

宗濟は幼くして僧籍にいた。鎌倉という世間から隔離された文化と仏門の牢獄にあって、精進料理と禁欲の煩わしさだけの不自由しか知らずに成長した。こうして鎌倉を飛び出して諸国をさすらいること数年、名もない民の苦しさや悲しさ、そして理不尽な死を、直接目のあたりにしてきたのである。

近臣の言葉以外に世の中を知ろうとしない父や兄と違い、宗濟は直接野を歩き、そして視て聴いた。上杉も然り、偏った貴種にありがちな曇り眼のなかにいる。これでは民衆の真実が見える筈もない。

世の中には、本音と建て前がある。

武士の生活は建前と体面に支えられており、その屋台骨は無辜の民が背負っている。このことを知る者と知らぬ者がいる。古河公方も関東管領も、このことを知らない。そして、宗濟は知っている。

ゆえに真里谷信勝のもとへ身を寄せるうえで、導き出されるその覚悟は、自ずと定めていた。

「我が御所はいずこか」

宗濟は囁くように問うた。さればと、信勝は前置きしてから

「小弓にて」

と大声で返答した。

「小弓は原ずれの城である。あれをくれるというのか？」

「あれこそ御所と呼ぶに相応しいかと」

確かに小弓は上総の拠点としては、よき立地であった。ここに宗濟が腰を下ろせば、原も、千葉も、迂闊には動けなくなるだろう。

真里谷信勝は転がり込んだ錦の御旗を、惚れ惚れと見上げるのであった。

宗濟が真里谷信勝のもとに庇護されたことは、古河公方をはじめ上杉一族にも知れ渡った。当然、千葉氏や原氏そして里見氏にも、である。

既に剃髪を止めていた宗濟は、ここで乱れていた髪を整え、髻を結び直すこと

「右兵衛佐義明」

と、その名を改めた。

そして古河公方父子の争乱とは別の、新たな関東の秩序を宣言し、その盟主になる旨を、近隣に布告したのである。

このことに衝撃を受けたのは、古河公方・足利高基だった。先年、父・政氏から公方職を譲り受けて、これからという矢先の出来事である。久喜の政氏もこのことを知り、大いに嘆いた。

「あれは幼少より激しい気性の子であった。ゆえに将来は足利家の家督に問題を生じるものと考え、早くから鎌倉に預けておいたのだ。還俗と称して古河を訪れてきたあのとき、僕は早く出家に戻って欲しかったからこそ、あの子に冷たく接してきた。なのに、ああ、どうしてこんなことになってしまったのか……ようやく足利公方家の争乱も治まろうかというこのときになつて……親不孝者め、愚か者め！」

激しく虚空へ思いの丈を吐き捨てた。

政氏が諸国へ発した言葉は

「古河の公方こそ正當なる関東公方なり。昨今の偽公方の虚言に惑わされることなかれ」というものである。

さしずめ真里谷信勝を臣下と置いた足利義明にとつて、次に臣従を頼るべき相手は、里見義豊であった。この要請に対する義豊の心中は不

満このうえなかつた。

「なんという理不尽なことやある」

と、このことに對し当初は義豊に應じる態度が皆無であつた。しかし、これに應じるべしと主張したのは、白浜城の里見義通、それに義通の息が掛かる奉行衆であつた。

足利政氏と高基が和解した際、里見義豊は高基支持の立場でありながら軽視されていた。それは義通が政氏支持をしていたためである。

古河公方として、高基は支持を得られなかつたことを根に持つだろう。里見氏は信頼にあたらぬ。きつとそう思っている。

今更尻尾を振ってなんとする。

高基にこだわる義豊の考えは狭い。

例え里見の当主が表向き替つたとしても、義通が隠居していようと、高基は執念深いだろう。

だったら、いつそ小弓の新興勢力との駆引きこそ、里見の立場を明確に置くことが適うに相違ない。

義通の考えは高度な政治的な見地にある。

義豊には、そういう御家のための都合と世間体について、考える頭がない。そのことを、実堯が稲村城に赴き、こんこんと論じた。

「殿はかつて、鎌倉の雪下殿と懇意にされておられましたな」

「たしかに」

「右兵衛佐殿はかつての雪下殿別当、その義理は、重つござります」

里見実堯の言葉に、義豊は忌々しそうに頭を振つた。

「儂が懇意としていたのは文化の交流。このよ
うな立場で懇意になりたいなどは、全く考
えではおらなんだ」

「しかし、そのような屁理屈が罷り通ることは
ございませぬ」

義豊は大きな溜息を吐いた。

「ああ、こんなことになるなら雪下殿とは仲良
くするのではなかつた」

「誰もがそのような打算的になる。だから今の

世は乱れておるのです」

「そのようなこと」

知つたことではない。義豊の言葉は、口に出す以前に、実堯に制された。

「殿は義理を果たさなければなりません」

「義理？」

「そうです。さもなければ、殿の正義は貫けませぬ」

「正義？」

「正義とは不義にならぬための当主の義理。これを守れぬ者からは、在地豪族も心離れてしまふもの」

実堯の申し様は語尾が強く、義豊はついつい口籠もつた。

「正義ある当主に人が集う、よくよく覚えて下さりませ」

「……」

義豊は口を噤んだ。一統ならばこのような煩いもない。その不自由さを、決して露わにせず噛み締めていた。

このち、真里谷城へは里見実堯と正木通綱が赴き、足利義明への臣従を口上した。使者としては申し分のない二人に、義明は満足そうに頷いた。

十十十

小弓の嵐(3)

夢酔 藤山